

第 46 回 宮崎リハビリテーション研究会 プログラム

日 時：令和 6 年 2 月 10 日（土）14：30 開会

会 場：JA AZM 本館 2F 大研修室

〒880-0032 宮崎市霧島 1 丁目 1 番地 1

TEL 0985 (31) 2000 FAX 0985 (31) 5700

事務局 〒889-1692 宮崎市清武町木原 5200

宮崎大学医学部附属病院リハビリテーション部内

会長 荒川 英樹

TEL 0985 (85) 0986 FAX 0985 (84) 2931

共 催 宮崎リハビリテーション研究会

久光製薬株式会社

開催および参加にあたってのお願い

【感染症予防対策について】

宮崎リハビリテーション研究会では、ご参加の皆さま及びスタッフの健康と安全を確保するため、下記の対応を行います。

ご参加の際は下記にご協力ください。

- ・マスク着用をお願いします。
- ・手指消毒をお願いします。

皆様のご理解・ご協力のほど、何卒よろしくお願い致します。

宮崎リハビリテーション研究会
会長 荒川 英樹

■ 参加者へのお知らせ

1. 参加費：会員 無料
2. 年会費：1,000 円 ※未納の方は受付で納入をお願いします。
3. 受付時間：13：50～

■ 演者へのお知らせ

1. 口演時間：一般演題 1 演題 4 分、討論 2 分
2. 発表方法
口演発表は PC (パソコン) のみ使用可能ですのであらかじめ御了承ください。
(1) コンピュータは事務局で用意いたします。持ち込みはできません。
(2) 事前に動作確認を致しますので、データはメールでお送りいただくか、CD-R または USB フラッシュメモリに作成していただき、事務局までお送りください。

※メール送信先： rehaken@med.miyazaki-u.ac.jp

発表データ提出締切 2024 年 1 月 31 日(水)必着

3. 発表データ作成要領
 - ・発表データの形式は Microsoft Power Point Windows 版 Power Point 2007 以上とします。
 - ・発表データのフォントは、標準で装備されているものを使用してください。
 - ・データのファイル名には、演題番号と発表者名を記載してください。

■ 世話人会のお知らせ 14：00～14：25 JA AZM 本館 2F 小研修室

■ 特別講演のお知らせ

16：30～17：30 特別講演Ⅰ

『 中枢神経機能画像診断 』

潤和会記念病院リハビリテーション科
部長 河野 寛一 先生

17：30～18：30 特別講演Ⅱ

『 リハビリテーション医療者の研究発表に役立つスライド作成のコツ 』

京都府立医科大学大学院医学研究科
リハビリテーション医学
講師 大橋 鈴世 先生

《上記講演は、次の単位として認定されています》

- ◆日本リハビリテーション医学会リハビリテーション科専門医 1 単位、認定臨床医 10 単位
(特別講演Ⅱ) ※受講料：1,000 円
- ◆日本整形外科学会教育研修会
特別講演Ⅰ：必須分野 [7.8]、運動器リハビリテーション単位 認定番号[23-1732-001]
特別講演Ⅱ：必須分野 [1.13]、運動器リハビリテーション単位 認定番号[23-1732-002]
(教育研修会単位取得には会員カードが必要です。必ずご持参ください。)
※受講料：各 1,000 円
- ◆運動器リハビリテーションセラピスト研修会 2 単位 ※受講料：2,000 円
- ◆健康スポーツナース認定資格更新講習会 1 時間 ※受講料：無料

14 : 30 ~ 14 : 55 一般演題 I

座長：鶴田病院 リハビリテーション科/宮崎県理学療法士会 中田 洋輔

1. 当院における肩関節周囲炎に対する拡散型圧力波の治療効果について
医療法人 常陽会 かわはら整形外科リハビリテーションクリニック 出口 彩乃 ほか
2. 拡散型圧力波(R-PW) による足関節背屈可動域の変化量の検証
～下腿三頭筋・筋腹への治療介入効果に着目して～
医療法人社団 睦由会 江夏整形外科クリニック 坂元 俊介 ほか
3. ハムストリングスの柔軟性向上目的に拡散型圧力波を使用する場合の周波数は、20Hz より 10Hz が有効である
医療法人社団橘会 橘病院 リハビリテーション科 甲斐 雅人 ほか
4. Hogrel マシンと振動刺激マシンによるハムストリングスのストレッチ即時効果の比較検討
医療法人社団橘会 橘病院 リハビリテーション科 藤田 靖昇 ほか

14 : 55 ~ 15 : 20 一般演題 II

座長：宮崎市立田野病院 鳥取部 光司

5. 中学女子バスケットボール選手と成人女子バスケットボール選手の下肢柔軟性の比較
医療法人社団橘会 橘病院 リハビリテーション科 外山 芹香 ほか
6. 地域高齢者の骨密度に関連する因子の検討 -体組成と運動習慣に関するアンケートの結果より-
医療法人社団牧会 小牧病院 満安 隆之 ほか
7. 装着型サイボーグ HAL[®] 医療用下肢タイプを用いた歩行運動療法を継続する患者の意思決定について
国立病院機構 宮崎東病院 リハビリテーション科 大村 観月 ほか
8. 当院回復期病棟でのウェルウォーク導入ありなしでの実績報告～脳卒中患者に対し
潤和会記念病院 リハビリテーション療法部 渡辺 拓也 ほか

15 : 20 ~ 15 : 45 一般演題 III

座長：宮崎県立日南病院 リハビリテーション科/宮崎県作業療法士会 津輪元 修一

9. 当施設における過去 3 年間の転倒・転落の実態
介護老人保健施設 シルバーエイト リハビリ診療部 後藤 眞育 ほか
10. 当院における転倒転落防止に向けた多職種カンファレンスの取り組み
宮崎大学医学部附属病院 リハビリテーション部 長田 響生 ほか
11. 当院における大腿骨転子部骨折術後経過の特徴について
球磨郡公立多良木病院 リハビリテーション部 坂田 尚亮 ほか
12. 地域包括ケア病棟の施設基準に対応した当院 CARB の取り組みと課題に関する報告
宮崎市立田野病院 リハビリテーション部 今村 秋雄

15:45～16:10 一般演題Ⅳ

座長：宮崎大学医学部附属病院 リハビリテーション部 中武 潤

13. 当院における身体機能と嚥下障害の関連性の有無について
球磨郡公立多良木病院企業団 医療技術部 リハビリテーション部 白川 悠奈 ほか
14. 舌の過緊張を認めた小顎症を伴う口蓋裂の一例
宮崎大学医学部附属病院 リハビリテーション部 立山 七絵 ほか
15. SBi Silicone インプラント[®]による人工中手指節間関節置換術後早期から
スタティックスプリントを使用した関節リウマチの一症例
宮崎大学医学部附属病院 リハビリテーション部 前田 翔吾 ほか
16. 集学的治療と生命予後を考慮したリハビリテーション治療により自宅退院に至った
脊髄悪性神経膠腫の一例
宮崎大学医学部附属病院 リハビリテーション部 湯村 千里 ほか

16:10～ 総 会

16:30～17:30 特別講演Ⅰ

座長：宮崎大学医学部附属病院 リハビリテーション部 荒川 英樹

『 中枢神経機能画像診断 』

潤和会記念病院リハビリテーション科
部長 河野 寛一 先生

17:30～18:30 特別講演Ⅱ

座長：宮崎大学医学部附属病院 帖佐 悦男

『 リハビリテーション医療者の研究発表に役立つスライド作成のコツ 』

京都府立医科大学大学院医学研究科
リハビリテーション医学
講師 大橋 鈴世 先生

18:30 閉 会

14:30～14:55 一般演題 I

座長：鶴田病院 リハビリテーション科/宮崎県理学療法士会 中田 洋輔

1. 当院における肩関節周囲炎に対する拡散型圧力波の治療効果について

医療法人 常陽会 かわはら整形外科リハビリテーションクリニック

○出口彩乃(でぐち あやの)、一井竜弥、山元ありさ、佐藤有紀、早野浩、高須尚樹、甲斐咲輝、河原勝博

当院では平成30年7月から理学療法の中に拡散型圧力波（以下 RPW）を導入している。

今回、肩関節周囲炎に対する RPW の治療効果を検討したので報告する。

対象は RPW 導入前の患者 10 名、RPW 導入後の患者 34 名（RPW 使用例 28 名、RPW 不使用例 6 名）。

方法としては、①RPW 導入前後での治療後肩関節屈曲可動域の比較②RPW 導入後の肩関節周囲炎患者の JOA スコア・NRS・ROM を、初回・1 ヶ月・3 ヶ月・5 ヶ月で評価し RPW の使用有無とともに比較検討した。

結果、①RPW 導入前後では導入後の方が肩関節屈曲可動域の改善率は高く、治療期間も短かった。②RPW の使用有無に関わらず JOA スコア・NRS・ROM はともに改善がみられたが 5 ヶ月目の比較では、RPW 使用例の方が正常に近い改善が得られた。したがって、RPW が肩関節周囲炎の肩関節屈曲可動域改善および治療期間の短縮に有効であることが示唆された。

2. 拡散型圧力波(R-PW) による足関節背屈可動域の変化量の検証

～下腿三頭筋・筋腹への治療介入効果に着目して～

医療法人社団 睦由会 江夏整形外科クリニック

○坂元俊介(さかもと しゅんすけ)(PT)、野口麻沙史(PT)、甲斐俊介(PT)、迫間紳吏(PT)、江夏剛(MD)ほか

【はじめに】近年、運動器領域における体外衝撃波治療（ESWT）の有効性を示唆する報告が増えた。当院では、2018 年 9 月に導入し臨床活用を進めている。日本でもショックウェーブ研究会（2016 年設立）が中心となり、収束型圧力波（F-PW）の様々な基礎研究と臨床研究のエビデンスは確立されつつあるが、拡散型圧力波（R-PW）は、臨床的効果検証の論文数も少なく、即時効果により臨床活用の幅を広げるに留まっている。

【目的】今回、20 名の健常者への R-PW の効果を検証することで、筋腹への R-PW が可動域量にどのような変化を与えるか検証することとした。

【方法】対象者は健常成人 20 名（男性 10 名、女性 10 名）、足関節疾患と下腿三頭筋の筋損傷歴のない人とした。R-PW は、BTL-6000 TopLine を使用し、ダンパーは 36 mm を発振圧力：3.0～5.0 Bar とし被験者の耐えられる強度を調整した。発振頻度は、10 Hz、2000 ショットとした。当て方は、超音波（KONICA 製 SNI BLE yb PREMIUM）にて下腿三頭筋の筋腹範囲を確認し、R-PW を施行した。肢位は、腹臥位-膝伸展位にて、足部をベットから外し、足関節の他動的可動域を測定した。施行者と測定者は特定の人とした。

【結果】R-PW にて顕著な可動域の変化量を認めた。

【考察】R-PW を下腿三頭筋の筋腹に施行することで他動的足関節可動域の拡大効果があることが唆された。

3. ハムストリングスの柔軟性向上目的に拡散型圧力波を使用する場合の周波数は、20Hz より 10Hz が有効である。

医療法人社団橘会橘病院 リハビリテーション科¹、医療法人社団橘会橘病院整形外科²

○甲斐雅人¹(かい まさと)(PT)、塩崎猛¹(PT)、柏木輝行²(MD)、小島岳史²(MD)

【はじめに】拡散型圧力波は筋弛緩作用に対する効果もあると言われているが、周波数について言及している研究はない。そこで今回、周波数の違いがハムストリングスの柔軟性にどのような影響を与えるかに着目し調査を行った。

【対象と方法】対象は健常成人男性 17名とした。照射設定を周波数のみ 10Hz群と20Hz群に無作為に分け比較した。また、照射中に違和感、疼痛のあった群（以下疼痛群）と、違和感、疼痛の無かった群（以下無し群）の2群に分け比較した。

柔軟性の評価は、股・膝関節 90° 屈曲位から他動にて膝関節を伸展させ膝関節の伸展角度（以下膝伸展角度）を測定した。

【結果】照射前・後の膝伸展角度の比較では、10Hz群が平均2.6° 拡大、20Hz 群が平均1.7° 拡大し、10Hz 群が有意にハムストリングスの柔軟性が向上した。10Hz 群の29%、20Hz 群の52%が疼痛を自覚し、20Hz群の方が有意に疼痛を自覚していた。無し群と疼痛群では無し群が平均4.6° 拡大、疼痛群が平均0.7° 縮小し、無し群が有意に柔軟性の向上が得られた。

【考察】今回の結果では 10Hz群で膝伸展角度が有意に拡大した。これは、20Hz 群の方が 10Hz群より違和感や疼痛を訴えた例が有意に多くこの疼痛が、防御性収縮によるハムストリングスの緊張を引き起こし、関節可動域拡大の疎外因子になっている事が示唆された。

4. Hogrel マシンと振動刺激マシンによるハムストリングスのストレッチ即時効果の比較検討

医療法人社団橘会橘病院 リハビリテーション科¹、医療法人社団橘会橘病院整形外科²

○藤田 靖昇¹(ふじた やすのり)(PT)、塩崎 猛¹(PT)、柏木 輝行²(MD)、小島岳史²(MD)

【はじめに】ハムストリングスストレッチ即時効果の先行研究として、Hogrel ネバータイトハム（以下 Hogrel）や振動刺激マシン from Foot（以下振動刺激）を使用した研究はあるが、この2つの器具を比較した報告はない。そこで、今回は2つの器具のハムストリングスのストレッチ即時効果の比較検討をした。

【対象、方法】対象は、健常成人 21 名とし、以下の課題を 1 人に 2 つ実施した。①Hogrel を使用し、股・膝関節屈伸運動を実施。②振動刺激を使用しハムストリングスを伸張した姿勢でのストレッチ運動を振動数 40 Hz で 60 秒間実施した。柔軟性評価には、下肢伸展挙上（以下 SLR 角度）と指床間距離（以下 FFD）を運動前後に測定した。

【結果】Hogrel の SLR 角度変化量の平均値は SLR 角度：5.3° FFD：-5.6 cm、振動刺激の変化量の平均値は、SLR 角度：3.7° FFD：-3.3 cmであり、Hogrel の方が有意にストレッチ効果が優れていた（ $P<0.05$ ）。

【考察】本研究の結果より、Hogrel の方が振動刺激よりハムストリングスのストレッチ即時効果が優れている可能性が示唆された。

それぞれの器具に長所、短所が存在するため、患者個々の関節可動域等の状態を考慮し器具の選択をする必要がある。

5. 中学女子バスケットボール選手と成人女子バスケットボール選手の下肢柔軟性の比較

医療法人社団橘会橘病院 リハビリテーション科¹、医療法人社団橘会橘病院整形外科²

○外山 芹香¹(とやま せりか)(PT)、塩崎 猛(PT)、柏木 輝行(MD)、小島 岳史(MD)

【はじめに】スポーツ選手において、中学生と成人の柔軟性を比較した研究報告はない。そこで今回、女子バスケット選手の中学生と成人それぞれの股関節柔軟性を比較した。

【対象と方法】対象は全国上位2校の中学生女子バスケット部26名、県上位の成人女子バスケット選手19名とした。倉吉らの股関節の柔軟性評価を参考にした。①腹位で膝関節屈曲②SLR③版臥位で股関節内旋④座位で股関節外旋⑤立位前屈⑥背位で一側下屈曲⑦側臥位の股関節外転を評価した。各項目左右0～2点とし点数化し比較した。統計学的有意水準は5%未満とした。また問診にて、ストレッチの重視度、週の実施日数、1日の時間を調査した。

【結果】中学生と成人では、左右共にSLR(中学生1.15点、成人1.79点)と股関節外旋(中学生0.69点、成人0.74点)が有意に成人の方が点数が高く、柔軟性に優れているという結果となった。その他の項目に有意差はなかった。ストレッチに対しての意識調査では、中学生のストレッチ重視度42%、成人26%。週の実施日数は中学生平均4.7日、成人2.1日であった。一日のストレッチ時間は中学生平均15.5分、成人31.6分であった。

【考察】今回の結果では、成人の方が有意に股関節の柔軟性があるという結果であり、本研究により柔軟性の向上にはストレッチの方法と時間の重要性を確認することができた。

6. 地域高齢者の骨密度に関連する因子の検討

—体組成と運動習慣に関するアンケートの結果より—

医療法人社団牧会 小牧病院 リハビリテーション科

○満安隆之(みつやす たかゆき)、前原孝政、圓福陽介、東友和(PT)、植村貞仁、深野木快士、小牧亘(MD)

【はじめに】令和5年10月19日に世界骨粗鬆症デーin都城が開催され、市民公開講座に参加した地域高齢者の骨密度に関連する因子を検討した。

【対象と方法】市民公開講座の参加者121名のうち、50歳以上の女性53名(68.3歳±8.2)を対象とした。踵骨骨密度測定を行い、YAM値70%以上の正常群33名と70%以下の骨密度低下群22名の2群間で比較し、検討項目は体重、BMI、筋肉量、体脂肪量、タンパク質量、骨ミネラル、主観的健康感、運動頻度、運動時間、運動種目とした。

【結果】体重、筋肉量、タンパク質量、骨ミネラル、運動種目に有意差を認めた($P<0.05$)。

【考察】正常群は、多様な運動を行うことで骨へのメカニカルストレスが加わり、骨形成が促進され、骨密度の維持が図れており、骨密度低下群は、運動負荷の増加とタンパク質摂取など栄養面の管理が必要であると考えられた。

【結語】骨粗鬆症予防のために、継続した啓発活動と適切な指導を行っていく必要があった。

7. 装着型サイボーグ HAL[®] 医療用下肢タイプを用いた歩行運動療法を継続する患者の意思決定について

国立病院機構 宮崎東病院 リハビリテーション科

○大村観月(おおむら みつき)(OT)、案納知久(OT)、津崎千佳(PT)、村井康成(PT)、川端伸美(PT)、榎木大介(PT)

【はじめに】長期・間欠的に装着型サイボーグ HAL[®] 医療用下肢タイプ(以下 HAL)による歩行運動療法を施行している筋萎縮性側索硬化症(以下 ALS)の症例において、機能低下を自覚しつつも HAL 治療を継続する理由を考察したため報告する。

【対象】家族性 ALS と診断された 40 代女性

【方法】期間：HAL 治療を目的とした入院を 15 回実施した 5 年間

評価項目：2 分間歩行テスト、10m 歩行テスト、FIM、EQ-5D-5L、日本語版 DRS

【結果】2 分間歩行テスト、10m 歩行テスト、FIM、EQ-5D-5L の項目では HAL 治療前後で比較すると短期効果が得られるも、長期的な経過をみると緩徐に低下していた。日本語版 DRS のみ最高得点を維持した。

【考察】疾病上、運動耐容能や歩行能力は徐々に低下するが、本症例においては HAL 治療後に日常生活関連動作の改善を実感しており、納得して治療を継続していることが分かった。生活期の神経筋疾患患者にとって HAL 治療に対する期待は大きいと言える。

8. 当院回復期病棟でのウェルウォーク導入ありなしでの実績報告～脳卒中患者に対し

潤和会記念病院リハビリテーション療法部

○渡辺拓也(わたなべ たくや)、楡田章人、原口真理土、藤井暁、内倉清等、菅原展寿

【目的】当院では 2021 年 11 月より歩行練習のいち手段として TOYOTA 社製歩行支援ロボットウェルウォーク-2000 (以下 WW) を導入している。そこで今回、歩行練習の介入効果について報告する

【方法】対象は 2022 年 1 月～2023 年 11 月の期間に当院回復期病棟に入棟し長下肢装具を作成した脳卒中患者 19 名。WW 実施群 11 名、非実施群 8 名の FIM 利得(退棟時運動 FIM 得点の総和－入棟時運動 FIM 得点の総和)を比較した。

【結果】WW 実施群、非実施群とも入棟～退棟時運動 FIM は有意差が見られたが ($P < 0.05\%$) 両群間の FIM 利得には有意差は見られなかった。しかし、WW 実施群において FIM 利得の平均改善率は、非実施群に比べ約 10 点高かった。

【考察】脳卒中患者に対する WW を使用した歩行練習は、ADL 向上の手段となる可能性が示唆された。今後は試行頻度、歩行距離などを分析し、更なる向上を目指したいと考える。

9. 当施設における過去3年間の転倒・転落の実態

介護老人保健施設 シルバーエイト リハビリ診療部

○後藤眞育(ごとう まさいく)(PT)、那須優一(PT)、田澤さおり(PT)、沖久美子(PT)、
福田洸希(OT)、上村莉帆(OT)

球磨郡公立多良木病院 整形外科

浪平辰州、帖佐直紀

【目的】転倒への理解を深めると共に円滑な多職種連携に繋げるため、当施設における転倒・転落の実態把握を行った。

【対象】2020/4/1～2023/3/31に当施設一般棟で発生した転倒・転落の事例142例とした。

【方法】後方視的にカルテ及び転倒・転落の報告書より、基本情報及び発生場所・発生時間・移動面を調査し検討した。

【結果】発生場所は居室が最も多く、発生時間は18時台や6時台、13・14時台が多かった。移動面は実行状況として車椅子使用者の転倒・転落が多かった。

【考察】発生場所及び移動手段に関しては先行研究と同様の結果となった。居室についてベッドサイドであることや1人になりやすいことが要因として考えられた。発生時間に関して複数の生活動作が伴う時間帯に多く発生していると考えられた。車椅子使用者に転倒・転落が多いことについて発生場所が居室であることや移乗動作を伴うこと、車椅子操作などが要因として考えられた。

【結語】前方視的研究や転倒についての啓蒙及び評価ツール等の検討が今後必要。

10. 当院における転倒転落防止に向けた多職種カンファレンスの取り組み

宮崎大学医学部附属病院リハビリテーション部¹ 宮崎大学医学部附属病院整形外科²

○長田響生¹(ながた きょうせい)、後藤夏季¹、小川灯子¹、宮崎茂明¹、荒川英樹¹、帖佐悦男²

入院中の転倒転落は骨折や頭部外傷等の結果を招く恐れや、動作能力やADLの低下に繋がる可能性がある。転倒予防においては多職種連携による介入が効果的であるとの鈴木らの報告がある。当院においても、2022年4月より週1回、皮膚科・泌尿器科病棟に入院中のリハビリテーション介入患者を対象に転倒転落防止に向けたカンファレンスを開始した。今回、カンファレンス開始前(2021年4月～2022年3月)と開始後(2022年4月～2023年3月)の期間の病棟入院患者の転倒率と、入院中に転倒転落をした患者を対象に、転倒転落スコアの変化(入院時・転倒時・退院時)の調査を行った。調査の結果、転倒率は1.22‰から1.57‰と僅かに高くはなっていたが、転倒転落スコアは、転倒時のスコア平均点がカンファレンス開始後の方で有意に低かった。これらの結果を元に考察や今後の課題を含めて報告する。

1 1. 当院における大腿骨転子部骨折術後経過の特徴について

球磨郡公立多良木病院 リハビリテーション部

○坂田尚亮(さかた なおあき)、本村涼馬、蔵座利文、尾崎純也

球磨郡公立多良木病院 整形外科

浪平辰州、帖佐直紀

【はじめに】当院における大腿骨転子部骨折術後経過の特徴について、日本クリニカルパス学会に掲載のあるリハビリパスを用いて調査した。

【対象】2023年5月1日から2023年11月30日までに当院で手術を施行した大腿骨転子部安定型骨折全23症例のうち、入院前歩行が自立していた17症例。

【方法】術後3日目、7日目、14日目の各条件を全て満たした患者・各基準日において逸脱した患者に分け、在院日数、認知機能、退院時歩行能力、荷重率、疼痛、BI、FIMの違いを調査した。

【結果】2群間において特に違いがみられたのは、疼痛、荷重率、在院日数であった。一方で2群間における認知症患者では認知機能と退院時移動能力には大きな違いは見られなかった。

【考察】当院における大腿骨転子部骨折術後経過は先行研究と同様に疼痛、荷重率に特徴がみられた。また、今回の認知症患者において認知機能と退院時歩行能力には違いがみられなかったことから認知症患者に対しても術後早期から疼痛コントロールを行い患側下肢への荷重を促すことで、早期の移動能力の獲得を図り、在院日数の短縮につながると考える。

1 2. 地域包括ケア病棟の施設基準に対応した当院 CARB の取り組みと課題に関する報告

宮崎市立田野病院 リハビリテーション部

○今村 秋雄(いまむら あきお)

当院は人口約1万人の宮崎市田野町で唯一の入院施設のある病院であり、田野町の医療中核を担っている。地域包括ケア病棟を有し、在宅復帰支援を機軸としている。入院期間が60日以内と設定されているため、早期退院に結び付けるためのリハビリテーション（以下、リハ）を行うことが重要となる。その中で、厚生労働省の定める施設基準に「リハを提供する患者について、1日平均2単位（40分）以上提供していること。」がある。しかし、当院は肺炎やフレイルで入院する患者が多く、体調や体力の面から1日平均2単位以上のリハ提供が困難なケースが存在する。そのような患者に対し、疾患別リハとは別にCARB（Complementary and Alternative Rehabilitation）を実施している。CARBとは疾患別リハを補完代替するリハの総称であり、リハ包括算定を活かした時間・単位・場所に縛られない特徴がある。今回、令和4年度に当院で行ったCARBの取り組みと課題を報告する。

13. 当院における身体機能と嚥下障害の関連性の有無について

球磨郡公立多良木病院企業団 医療技術部 リハビリテーション部

○白川悠奈(しらかわ ゆうな)(ST)、蓑田健二(ST)、東一久(ST)、魚住春奈(ST)

球磨郡公立多良木病院 整形外科

浪平辰州(MD)、帖佐直紀(MD)

【はじめに】嚥下機能以外の身体機能と嚥下障害に関連があるか調べ、多職種でも安全で簡便に嚥下障害を予測できる方法がないか検討した。

【対象・方法】ST介入中の入院患者33名(男性17名、女性16名)、平均年齢は84歳±14歳。方法は、握力、頭部挙上、座位姿勢、オーラルディアドコキネシス、最長発声持続時間の5項目を測定し、水分トロミ有り群・トロミ無し群で比較した。

【結果】今回計測した握力、頭部挙上、座位姿勢、オーラルディアドコキネシス、最長発声持続時間の5項目すべてにおいて有意差($p<0.05$)がみられ、各項目それぞれがトロミの有無に影響を与える結果となった。

【考察】握力、頭部挙上、座位姿勢と嚥下障害との関連性があるということが示唆された。嚥下に直接関与する機能だけでなく、身体機能(握力、頭部挙上、座位姿勢)も嚥下に影響を受けることが分かった。多職種が普段の生活の動作から嚥下障害の可能性を予測できると考えられた。

14. 舌の過緊張を認めた小顎症を伴う口蓋裂の一例

宮崎大学医学部附属病院 リハビリテーション部

○立山七絵(たてやま ななえ)、荒川英樹、帖佐悦男

口唇裂・口蓋裂とは、胎児期における癒合不全により口唇または口蓋が離れた状態で出生する先天性疾患である。口蓋裂の場合、哺乳の際、吸啜圧と圧迫圧が上がらないとミルクを口腔内に捕らえることができず、哺乳障害を生じることがある。本症例は、哺乳量増加に伴い気道狭窄音が出現し、経口哺乳が困難となり、言語聴覚療法の介入となった。評価時において、安静時より気道狭窄音が聞かれ、啼泣時には陥没呼吸も認めることもあった。口腔内視診では舌尖が挙上しており、舌に触れると緊張が高く、過緊張が確認された。哺乳時は吸啜反射はあるものの、乳首で舌は奥に押され、次第に気道狭窄音が強まることがあった。訓練では、舌の上に指を押し当て、舌の緊張を緩めるよう刺激を与えた。徐々に安静時の舌尖挙上は軽減し、哺乳量も増加傾向であった。今回、言語聴覚士が介入することで哺乳時に必要な口腔運動の改善を図ることができ、哺乳量の増加につながったと考える。

15. SBi Silicone インプラント[®]による人工中手指節間関節置換術後早期から スティックスプリントを使用した関節リウマチの一症例

宮崎大学医学部附属病院リハビリテーション部

○前田翔吾(まえだ しょうご)、大田智美、中武潤、荒川英樹、帖佐悦男

【報告目的】RAの人工MP関節置換術に関して、リハビリテーション治療経過を詳しく述べた報告は少ない。今回 SBi Silicone[®] インプラントを使用し経過良好であった症例を担当し、早期より安静装具のみを使用したため報告する。

【症例】70代女性、右利き、RAで通院中、右手の変形による外観の矯正と右手指の機能改善を希望され、右示指から小指までの人工MP関節置換術施行された。

【経過】術後2日目から介入し、早期より日中・夜間ともに尺側偏位防止装具のみを使用した。右手指の屈曲ROM訓練は、段階的に増やし、インプラントの脱臼に注意しながら介入した。

【結果】術後3ヵ月で、術指の屈曲ROM・握力・ピンチ力・STEF・HAND-20・HAQの改善を認めた。

【考察】本症例では、早期の安静装具使用と運動療法で手指のROMと機能の改善、ADL拡大を図ることが可能であった。MP関節屈曲の段階的な角度調整と患者個々に合わせた装具療法を行うことが効果的であると考えられた。

16. 集学的治療と生命予後を考慮したリハビリテーション治療により自宅退院に至った 脊髄悪性神経膠腫の一例

宮崎大学医学部附属病院 リハビリテーション部

○湯村千里(ゆむら ちさと)、長田響生、中武潤、荒川英樹、帖佐悦男

【目的】Th3-5 胸髄神経膠芽腫に対し手術・放射線・化学療法が適応された対麻痺患者に、生命予後と治療関連有害事象を踏まえ実施したリハビリテーションについて報告する。

【症例紹介】40歳代女性、排尿と立位が困難となり、精査加療目的で当院入院した。入院時、下肢MMT 右3/左0、Th6以下で重度の感覚障害と膀胱直腸障害を認めた。

【経過】術後は、両下肢MMT0、Th4以下の重度感覚障害、頸肩部の疼痛と発汗過多、起立性低血圧を認め、移乗動作は2名介助を要した。生命予後を考慮し自宅退院の予定であり、移乗動作自立を理学・作業療法目標として介入した。転院し放射線療法・化学療法を施行後、当院再入院時にはスライディングボードを用いた移乗動作が1名介助で行えた。その後、自宅近医へ転院し、家族の介助で移乗動作が可能となり自宅退院となった。

【考察】今回、移乗動作に焦点を当てた介入を行い自宅退院が可能となった。生命予後と治療関連有害事象を考慮して実施した介入が有効であったと考える。

16:30～17:30 特別講演Ⅰ

座長：宮崎大学医学部附属病院 リハビリテーション部 荒川 英樹

『中枢神経機能画像診断』

潤和会記念病院リハビリテーション科
部長 河野 寛一 先生

近年の中枢神経画像診断器機の発達のおかげで、私たちは非侵襲的に脳の損傷部位の正確な診断のみならず、脳機能の評価も画像として見る事ができるようになってきた。脳の神経伝達物質の測定に PET、脳活動に伴う脳局所血流変化を測定する NIRS や SPECT、fMRI、脳の電気生理学的な評価には MEG、TMS が用いられる。これらの器機によって得られた知見は、中枢神経障害患者に対するリハビリテーションに重要な根拠を提供する。

17:30～18:30 特別講演Ⅱ

座長：宮崎大学医学部附属病院 帖佐 悦男

『リハビリテーション医療者の研究発表に役立つスライド作成のコツ』

京都府立医科大学大学院医学研究科
リハビリテーション医学
講師 大橋 鈴世 先生

われわれ医療従事者では、研究発表などスライドを用いてプレゼンテーションを行う機会が少なからずありますが、そのスライドの作り方のコツについて系統立てて知る機会がほとんどないのも実情です。「情報を伝えるためのデザイン」において最も重要なのは、見せ方の基本的なルールを知ることです。今回はこうしたスライド作成における法則やルールについて紹介します。

◇◇◇ 閉会 ◇◇◇